

研究課題名：任意参加方式の産業歯科保健プログラムへの不参加者に対する実施プログラムが口腔内状態の改善におよぼす要因の解明  
～就業者の歯科口腔保健の健康格差縮小を目指して～

研究者名：武藤孝司<sup>1)</sup>、市橋透<sup>2,1)</sup>、高田康二<sup>2)</sup>、西埜植規秀<sup>3)</sup>

所属：<sup>1)</sup> 獨協医科大学医学部公衆衛生学講座、<sup>2)</sup> (公財) ライオン歯科衛生研究所、<sup>3)</sup> ライオン(株)健康サポート室

### 【目的】

著者らはプログラムを任意参加方式から全員参加方式に切り替えた某企業の社員を対象に、任意参加方式のプログラムに参加経験の「ない者(不参加者群)」と「ある者(参加者群)」を解析し、不参加者群では口腔内状態や健康行動が悪い傾向にあることを明らかにしてきた。

そこで今回、同じ対象者を追跡調査し、不参加者群の口腔内状態の改善や悪化に関連する要因を明らかにする目的で本研究を行った。

### 【対象および方法】

対象は(公財)ライオン歯科衛生研究所が実施するプログラムを2001年までは任意参加方式で実施し、02年から全社員を対象に実施した某企業社員で、02年と03年のプログラムへの連続参加者2,219名である。対象者を02年の質問紙調査から任意参加方式プログラムへの不参加者群と参加者群に分類し、さらに02年から03年にかけてCPI個人コード3,4から個人コード0,1,2に変化した者と個人コード0,1,2のまま推移した者を「歯周ポケット無し群」、個人コード0,1,2の者が個人コード3,4に変化した者と個人コード3,4のまま推移した者を「歯周ポケット有り群」として歯周ポケットの有無に関連する要因など解析した。

### 【結果】

多重ロジスティック回帰分析で、不参加者群で有意となった項目はオッズ比が高い順に、口の中で気になること(OR 2.22)、喫煙習慣(OR 2.06)で、口の中で気になることが「ある」とタバコを「吸う」は歯周ポケット「有り」と関連が認められた。

参加者群で有意となった項目は、歯間ブラシ(OR 1.59)、口の中で気になること(OR 1.56)、喫煙習慣(OR 1.52)、喪失歯(OR 1.30)、かかりつけの歯科医院(OR 0.76)デンタルフロス(OR 0.70)で、歯間ブラシを「使う」、口の中で気になることが「ある」、タバコを「吸う」、喪失歯「1本以上」は歯周ポケット「有り」に関連し、かかりつけの歯科医院が「ある」、デンタルフロスを「使う」は歯周ポケット「無し」と関連が認められた。

### 【まとめ】

不参加者群でプログラム実施1年後の歯周ポケットの有無に関連する要因は「口の中で気になること」と「喫煙習慣」であり、プログラムに参加しない者に対しては口腔内の気になることを問診などで把握し、行動変容や意識の向上を促す動機づけと喫煙者に対する禁煙指導が重要と考えられた。不参加者群では参加者群で関連がみられた歯科の健康行動やセルフケア行動の要因との関連がみられなかったことから、すべての社員の口腔保健の向上と底上げを図ることが必要であり、すべての社員が参加できる体制づくりが必要と考えられた。